

## G. Ritzer における合理性の問題 —— マクドナルド化理論の外延と内包 ——

伊 藤 賢 一

理論社会学研究室

### A Problem of Rationality in G. Ritzer : Denotation and Connotation of McDonaldization Theory

Kenichi ITO

Sociological Theory

#### Abstract

G. Ritzer wrote that he made his theory of McDonaldization on the basis of the concept of rationality by Max Weber and Karl Mannheim. According to Ritzer, McDonaldization expresses the contemporary way of rationalization process of Western modernity which Weber described, however, what he means through this theory is not clear enough. This paper aims to make clear what his theory exactly means by examining how he accepts the concept of rationality from Weber and Mannheim.

#### 和 訳

マクドナルド化理論を提唱した G. Ritzer は、Weber と Mannheim の合理性概念を基礎にして自らの理論を構築したと述べている。マクドナルド化とは、Weber が描いた西洋近代の合理化プロセスの現代的な形態であるとされるが、その意味しているところは必ずしも明瞭ではない。本論文は、Ritzer が Weber と Mannheim の合理性概念をどのように受容しているのかという点に注目することで、この理論が意味するものを明確化することを目指すものである。

キーワード：マクドナルド化、合理性、合理化、ウェーバー、マンハイム

## はじめに

「マクドナルド化 (McDonaldization) 理論」を提唱した G. Ritzer は、Weber と Mannheim の合理性概念を基礎にして自らの理論を構築したと述べている (1993=1999; 1998=2001; 2001; 2002)。「マクドナルド化」とは、Weber が描いた西洋近代の合理化プロセスの現代的な形態であるとされるが、その意味しているところは必ずしも明瞭ではない。本論文は、Ritzer が Weber と Mannheim の合理性概念をどのように受容しているのかという点に注目することで、「マクドナルド化」が何を意味しているのかを明確化し、この議論につきまとう曖昧さの正体をつきとめようとするものである。

### 1. Weber の形式合理性／実質合理性の受容

マクドナルド化とは、ファストフード・レストランに象徴される原則が現代社会の多くの部門を支配するようになる過程をさし、とりわけさまざまな不都合をきたすような事態をさしている。ファストフード・レストランの原則とは、(1)効率性、(2)計算可能性、(3)予測可能性、(4)脱人間化されたテクノロジーによる制御、であり、いずれもマクドナルドのようなファストフードのレストラン・チェーンで採用されているものだという。これらの原則は、とりたてて新しいもの、というわけではないが、「マクドナルド化」の新しさは、従来主に生産過程についていわれていた合理化過程が「消費の場面にまで拡大したこと」にある、とされる<sup>(1)</sup>。しかし Ritzer がこの事態に注目しているのは、この合理化過程が次のような側面をもつからである。

以上の四つの基本原則に加えて、五番目の考え方、これはたぶん原理ではないけれども、合理性がもつ非合理性という考え方が、マクドナルド化の過程と密接に結びついている。すなわち、合理化された(つまりマクドナルド化した)システムは、否応なく一連の非合理的な事態をもたらすようにみえる。一番顕著なこととして、マクドナルド化したシステムは世界を脱魔術化し、神秘的なものをほとんど除去して世界から人間性を奪い、やがて一連の非人間的もしくは反人間的な活動や行為に至ってしまう傾向がある。マクドナルド化の理論が批判的要素を含んでいるのは、この合理性がもつ非合理性という考え方がその中にあるからである。(リッツァ、2003: 102-103)

Ritzer は確かにマクドナルド化に肯定的な意味を読み込んでもいるが、全体としては批判的にこれを扱っている。「合理性の非合理性」、という言い方を彼は好んで用いているが、この場合、第一の肯定的に使われる「合理性」と第二の否定的に使われる「合理性」とでは意味が異なるのではないかと考えられる。Ritzer は Kalberg (1980) を引きながら Weber の 4 つの合理性概念 (実践的 practical／理論的 theoretical／実質的 substantive／形式的 formal) を参照しているが<sup>(2)</sup>、とりわけ彼が注目しているのは形式合理性／実質合理性という対概念である。形式合理性／実質合理性とは、Weber

が『経済と社会』において法・経済の領域を分析する際に用いた概念で、たとえば「経済行為の社会的基礎範疇」(1921=1989)では、次のように記述されている<sup>(3)</sup>。

経済行為の形式合理性とここでいうのは、その経済行為にとって技術的に可能でもありまた現実に経済行為に適用されてもいる計算の度合いのことをさすものとしよう。これにたいして、実質合理性というのは、経済的指向をもった社会的行為による一定の人間集団〔それが限られた範囲のものであれ〕のそのときどきの財供給が、一定の価値評価の公準〔それがどのような性質のものであれ〕という観点から、そのような公準のもとで観察されて、行われているまたは行われうる度合いのことをさすものとしよう。この実質的合理性という語は高度に多義的である。(Weber, 1921=1989: 330)

先に言及したファストフード・レストランの原則の中に「計算可能性」が入っていたことに示されるように、ファストフードのやり方は形式合理性ときわめて親和的である。むしろ、効率性、計算可能性、予測可能性、テクノロジーによる制御、という特徴は、すべてここでいう形式合理性につながるものといえる。この形式合理性がときに対立するものが実質合理性ということになる。実質合理性は、先に引用した Weber の用語系では「一定の価値評価の公準」に従って判断されるものなので、多様な意味を持ちうる概念であり、このように考えるならば、形式合理性も実質合理性の多様なありかたの一つともいえるが、さしあたりここでは、形式合理性以外の何らかの価値評価の公準に従うもの、としておこう。

「合理性の非合理性」という場合、第一のものは「形式合理性」、第二のものは「実質合理性」を表している、とさしあたりはいえる。Ritzer は、形式合理性を強化する動きを押し進めたものが「マクドナルド化」、と考えており、彼がマクドナルド化の「先駆者」として提示する官僚制、フォーディズム、流れ作業的生産、ショッピングモールといったものはすべて形式合理性の原理に貫かれたものといえる。

Weber の合理性概念の受容に関して、千葉芳夫 (2003) は、Ritzer が (集団をも含む) 行為者レベルでの合理性とシステムレベルでの合理性を混同している、と指摘している。つまり、システムのレベル (経済や法のレベル) では合理的なものが、そこで働く個人にとっては (ある価値観や観点からすれば) 非合理的という図式になっているはずだが、Ritzer においてはこの区別が明確ではなく、「マクドナルド化の考察にある種の混乱を引き起こしている」という (千葉, 2003: 171)。

確かに Weber の実質合理性概念は多次的に設定されているが、少なくとも Ritzer はこのことに言及してはいる。Ritzer の整理では、Weber の実質合理性概念は、「ミクロ客観的行為 (選択)」と「マクロ主観的価値」を含んでいる、とされ、さらに、「すくなくとも暗示的には、目的に適合的な手段の選択にいたるミクロ主観的な思考過程も等しく含んでいる」とされる。Mannheim に比べれば、「ウェーバーの概念化の方がより豊かであるが、しかしその豊富さそのものが、それをいようとす者にとって問題となる」(Ritzer, 1998=2001: 37)、と述べているように、Ritzer はマクロな水

準の合理性とミクロな水準の合理性とが違うということに（少なくとも主観的には）気がついていないはずである。

しかしこうした Weber の概念の「豊か」さは、Ritzer にとっては邪魔なものになる。これは、主として Weber の関心領域と Ritzer の関心領域の違いに由来するものと思われるが、Ritzer にとって、より使いやすい合理性概念は、Mannheim のそれである。

## 2. Mannheim の機能的合理性／実質的合理性の受容

多くのものを意味するゆえに、Weber の実質合理性は形式合理性と必ずしも対立するわけではないが、これに対して、二つの合理性を対立するものととらえているのが『変革期における人間と社会』における Mannheim (1940=1962) である。Ritzer (1998=2001) はこちらの合理性概念の方を評価している。

Mannheim における実質的合理性は「所与の状況における諸事情の相互関係を洞察し明示する思考活動」(Mannheim, 1940=1962: 62)<sup>(4)</sup>とされ、Ritzer はこれを「ミクロー主観的概念」と捉えている (Ritzer, 1998=2001: 37)。「ミクロー客観的行為(選択)／マクロー主観的価値／ミクロー主観的な思考過程」といったさまざまなものを含みうる Weber の実質合理性に比べると、ミクロー主観的水準だけで純粋に作用する Mannheim の実質的合理性は、「はるかに適切な概念」とされる。

これに対して、実質的に「非合理」とされるものは、「虚偽であるものないし全然思考活動でないもの(例えば、意識的たると無意識的たるとを問わず、本能、衝動、欲求、感情のごとき)」(Mannheim, 1940=1962: 62)であり、Mannheim の場合、実質的な合理性／非合理性は、ミクローな主観的な行為・選択・思考などの過程に思考過程が介在するか否かで判断される。

一方、Mannheim のいう機能的合理性は、「一連の行動があらかじめ定められた目標に達するように組織され従ってかかる行動の各要素に機能的な位置や役割が与えられているという事実」に関わる。これには2つの基準があり、第一に、「一定の目標を目指して機能的に組織化されていること」であり、第二に、「観察者あるいはそれに適応しようとする第三者の立場から見て予測しうるかどうかということ」(Mannheim, 1940=1962: 63)である。こうして見てくると、Mannheim の機能的合理性は、Weber が官僚制の概念でとらえた近代組織の特徴とされるものと重なり、形式合理性の概念を、近代組織に即してより限定したものと捉えることができよう。Ritzer の問題意識にとっては、このように特定化された Mannheim の概念の方が都合がよいのであり、彼が「合理性の非合理性」として指示している事態も、Mannheim 的な実質的合理性と機能的合理性との対立、として捉えることができる。

ウェーバーもマンハイムも、形式／機能的合理性が、時間の経過とともに実質／実質的合理性を支配し、ひねりつぶし、そして「停滞させる」にいたるという感覚を共有していた。さらに、両者はこの発展が一連の負の効果をもつとする見解を受け入れていた。しかしながら、マンハイムの図式では、なぜわれ

われが、機能的行為の進展によってもたらされる個人の思考能力の喪失に心を痛めるべきなのかが明白であるのに対して、このことについてのウェーバーの見解は、なぜわれわれに関係あるのかを明白にしていない。(Ritzer, 1998=2001: 44)

ところが、Ritzer からみると、Mannheim は「合理性の非合理性」を捉え損なっている。というのは、Mannheim は問題をミクロな水準でしか捉えておらず、世界の解体を「あるタイプの行為（実質的行為）に取って代わる、もうひとつのタイプの行為（機能的行為）をとまなう」としか理解しないからである。つまり、Ritzer によれば、「マンハイムは、マクロ構造が解体の源泉であることを明確に理解していない」(1998=2001: 46)。そのために解決策として「計画」を提唱することができた、というのだ。

結局のところ、マンハイムはウェーバーによってみごとに浮かび上がらされた問題、そして今日のマクドナルド化システムによって十分に例証される鍵となった問題を見失っている。その中心問題は、こうしたシステム自体の非合理性にあるのであって、それらを壊そうと脅かす非合理的な力にあるのではない。マンハイムのもっとも決定的な過誤は、合理性の中核にある非合理性をみることができなかったことなのである。(Ritzer, 1998=2001: 58 強調は原著者)

われわれはここで、理論家にとっての問題関心の相違を考慮に入れざるをえない。ナチズムに追われてロンドンに亡命していた Mannheim にとっては、合理的なシステムを「脅かす非合理的な力」こそが重要な問題であって、Ritzer にとっての問題である「合理的なシステムの中核にある非合理性」を重視しなかったからといって、これを「決定的な過誤」と判断することは不当であろう。

いずれにせよ、上述のように、Ritzer は Mannheim の「機能的／実質的合理性」という概念を、彼の問題関心にひきつけて評価している。それは、ミクロな水準に設定されているという理由で具体的に考える際に有用だからである。したがって、Ritzer の「マクドナルド化」理論は、Weber が重視していた問題に対して、Mannheim の概念をつかって答えていることになる。「合理性の非合理性」とは、実質的合理性の低下という代償を払ったうえでの「機能的合理性の増進」を表す、とされるのである (Ritzer, 1998=2001: 61)。

### 3. 「マクドナルド化」の構成要件

「マクドナルド化」として Ritzer が捉えている事態は、機能的合理性（＝外部からその動きが予測できるような、機能的な組織化）が増進すればするほど、実質的合理性（＝とくに組織の末端に位置する人びとによる思考を含んだ行為）が低下する事態である。組織のトップにいる人びとは、その能力を十分に発揮して組織をつくったり、業務を割り振ったりできるが、末端にいけばいくほど思考の

余地はなくなり、自由裁量が減っていく状態を指すものと思われる。

しかしこれだけでは、官僚制組織における労働の疎外、といった古くからある事態を指すにとどまり、マクドナルド化の概念が示唆する「新しさ」に到達しない。上記の事態に Ritzer がさらに付け加えなければならないのは、顧客をも巻き込んだかたちで、消費の場においても機能的合理性が貫徹するという事態のはずである。マクドナルドを初めとするファストフード・レストランは、従来は従業員が行っていたサービスを客に無償でさせるようにし、客を「教育する」ことをやってのけた。さらにドライブ・スルーの登場は、店に入ることさえ不要にする究極の機能的合理化である。ここでは「流れ作業的な消費」が、客の自発的な協力によって可能になっている。

さらに、「マクドナルド化」という表現が妥当であるためには、ファストフード以外のさまざまな局面にもファストフードの「原理」が波及していなければならない。ファストフード・レストランが登場する以前には異なるやり方で運営されていた領域に、「効率性、計算可能性、予測可能性、テクノロジーによる制御」という原則が浸透していくことで、初めてわれわれは「マクドナルド化」について語るができるはずである。

しかし、ここでわれわれ（と Ritzer）はある困難に直面する。というのは、どういった事態が成立すれば「マクドナルド化」が起きているといえるのか、その構成要件が、Ritzer の記述に従う限りでは定まっていないからである。ファストフードのレストランで起きていることなら、すなわち、油井（2003）が「狭義のマクドナルド化」と呼んだ事態であれば、おそらくそのほとんどが「マクドナルド化」を表すものと考えてもよいただろうし、ステーキやシーフードを提供するいわゆる「ファミリー・レストラン」や、もう少し高級なレストラン・チェーンも「マクドナルド化」の例と見なすことにそれほど抵抗はないと思われる。しかし、レストラン・チェーンの事例を離れて、より広い文脈に置き換えたときに、どこまでそれが許されるのかは自明のことではない。マクドナルド化とそれ以外を分けるものは何なのか、いわば「マクドナルド化」の外延が不明瞭なのである。このことは、多くの論者が指摘するところでもある<sup>(5)</sup>。

リッツァは宅配や出来合いの食材（特に「電子レンジ食品」）もマクドナルド化の概念に含めている。…だが、こうした方向へ拡張するならば、極端に言えば、自分で作った材料を自分で調理する以外はマクドナルド化だということになる。そして、ここまでマクドナルド化の概念を拡張するならば、現代の消費資本主義の社会では、マクドナルド化を押し止めることなどできない、ということになってしまうであろう。（千葉，2003：167）

この点について一点だけ指摘しておきたいのは、すべての消費行為は個人の選択の結果であると同時に学習過程でもあるということである。そして、学習過程は、一方で定式化されたスタイルを習得する過程であり、他方で創造的なパターンを産出する過程でもある。したがって、マクドナルドにおいて「躰しつけられる」消費スタイルは「マクドナルド化」であって、フランス料理を食事マナーにもとづいて食べる

ことは「マクドナルド化」ではないと言えるだろうか。携帯電話メールの短く意味のないメッセージを休みなくやりとりするという新しいコミュニケーション関係の発生は「マクドナルド化」なのであろうか。(若林, 2003: 283)

たとえば「効率性」ひとつとっても、人類がこれまで開発し改善してきたさまざまなものごとのやり方は、効率性の向上を目指していたといえるのではないか。近代の機械を用いた工業製品の生産にとどまらず、農業技術や狩猟、趣味の園芸や料理、スポーツにおいても、効率よく何かを成し遂げることは多くの人びとが望んでいたことであるし、そうしたやり方が継承されてきた。どの線を踏み越えたらそれはマクドナルド化していることになり、どこまでが「伝統的な／本来的な」やり方といえるのだろうか。

Ritzer によれば、大学でマークシート方式の試験を行うことは、採点を人の手から機械に移したことになるので高等教育における「効率化」を、それゆえ「マクドナルド化」を表す、とされる (Ritzer, 1993=1999: 81)。また、出産の際の帝王切開は「自然な」出産に比べて「予測可能性が高まる」ので、それだけマクドナルド化されていることになる (Ritzer, 1993=1999: 268-272)。「火葬」という埋葬のやり方は、「伝統的な埋葬や葬儀」のやり方に対して、一同が火葬場に滞在する時間が前もって分かるので、計算可能性が高くマクドナルド化された方法だという (Ritzer, 1993=1999: 278)。こうした判断は、場合によっては恣意的にも思われるし、マクドナルド化の外延を拡大しすぎているように思われる。これでは「合理化」と呼ぶのと変わらないのではないか。

また、外延 (範囲) だけでなく、内包 (内容) についても疑義が出されている。つまり、「マクドナルド化」を「合理性」からのみ捉えてもよいか、という問題である。千葉 (2003) によると、消費と娯楽の融合が、消費者を惹きつける魅力であることを、Ritzer は十分に理論化しえていない。つまり、マクドナルドは「楽しいところ」としての演出が施された空間であり、そのことはファストフードが定着するためには「効率性」や「計算可能性」におとらず、重要なことだったのではないか、という指摘である。

合理性は生産から消費へと直線的に拡大していくわけではない。生産の領域では、効率性を中心とする合理性が有効性を持つが、消費の領域では、特に現代のような豊かな消費社会においては、合理性だけでは消費者を惹き付けることはできない。客を集めるためには、システムの中に楽しさ、娯楽性といった非合理的要素を組み込まざるをえない、ということであろう。この捉え方が正しいとすれば、マクドナルド化は単なる合理化の拡大ではなく、消費の領域における合理的要素と非合理的要素との結合・混合と考えるべきだ、ということになる。(千葉, 2003: 181)

「楽しさ」「娯楽性」が非合理的要素であるか否か、ということに関してはいろいろな考え方があるかと思われるが、先に Ritzer が上げていたファストフードの 4 つないし 5 つの原則には確かに「楽し

さ」や「娯楽性」が入っていない。Ritzer は、ファストフード・レストランが「楽しさ」を伴う場所であることは何カ所かで指摘しているが、その取り上げ方は「二流の楽しさ」「偽の雰囲気」、といった扱いである。

ファストフード・レストランなどの店は、食べ物のために遊園地であり、色とりどりでけばけばしい記号と象徴にあふれている。マクドナルドは、ロナルド・マクドナルドというどこにでもいそうなピエロやさまざまなマンガのキャラクタを使って、人びとに、次に来るときも楽しいことが待ち受けていることを確信させる。(Ritzer, 1993=1999:202)

現代のコードの一部である楽しい食事という点で、われわれはファストフード・レストランへと引き寄せられ、落ち着いた雰囲気の中ですばらしい食事を提供することにだけ懸命な、「流行遅れ」のレストランから離れていくのである。さらに一般的にいえば、われわれは、すべてではないにしても、他の多くの消費手段の中に楽しさを探そうになる。(Ritzer, 1999=2001:225-226)

ここで再び、ファストフード的な「楽しさ」と、「流行遅れ」のレストランの「落ち着いた雰囲気」を分けているものは何なのか、という疑問が持ち上がる。それは恣意的な判断ではないのか。レストランの「雰囲気」を、食事の「質」をごまかすための偽りの要素と判断しているせい、ここで Ritzer は「すばらしい食事を提供することにだけ懸命な」レストラン、という無理な想定をせざるを得ない。

いずれにせよ、マクドナルド化の概念は、Mannheim から受け継いだ機能的合理性の境界をむしろ曖昧にしているし、さらに彼が原理として列挙している内容にも不十分な点があるのではないだろうか。マクドナルド化の概念を今後も活かしていこうとするならば、「確かにマクドナルド化が起きている」と言えるための条件について明確化し、現代の消費行動を的確に捉えるためのさらなる考察を行う必要がある<sup>(6)</sup>。

## おわりに

Ritzer が「合理性の非合理性」として列挙している事例のなかで、われわれがとくに重要と考えるのは「人間関係への否定的影響」とされるものである。

従業員と客との関係だけでなく、ほかの関係も大きく制限されている。従業員はたった数カ月しか仕事を続けないため、従業員同士の十分な個人的関係は発達しにくい。このことを、終身雇用制が仕事上の長期に及ぶ関係を育てている日本の場合と対比させてみるとよい。加えて、日本の労働者は仕事の終わった後や週末に互いに集まる習慣がある。ファストフード・レストランの仕事の、一時的でパートタイム的性格は、従業員同士の個人的関係の可能性を大きく排除している。(Ritzer, 1993=1999:215)



家庭での食事は、ファストフード・レストランの食事とたいした違いはない。家族は、1940年代には昼食と一緒にとることをやめ、そして1950年代には朝食も別々にとるようになった。こんにち、家族の夕食も同じ運命をたどっている。…家族らしい食事を破壊するのに中心的役割を果たした技術体系は、電子レンジと、それによってもたらされた電子レンジで調理可能な食べ物の氾濫である。…電子レンジ料理の速度は、電子レンジで調理可能な食べ物の著しい多様化とともに、家族員が別々の時間と場所で食事をとることを実現させた。(Ritzer, 1993=1999:217-218)

実際にファストフードの従業員同士で人間関係が発達しにくいのかどうかは議論の余地があるし<sup>(7)</sup>、そのことをマクドナルド化の概念で論じることが妥当かどうかは、あらかじめ決められるものではないと思われる。ファストフード・レストランと一口にいっても、おそらくいろいろなケースがあるのだろうし、いつでも辞めることが可能な職場だからこそ、辞めないでもらうための工夫を導入していることもあるだろう<sup>(8)</sup>。

電子レンジが普及したことで家族員がバラバラに食事を取ることが可能になったことは、ある意味では家事労働からの解放でもあり、依存関係からの解放でもあったと思われるが、制約がなくなったことで人間関係が希薄化するというパターンは他のいくつかの場面でもありうることだと考えられる。このことを「マクドナルド化」の概念で捉えるのが有効なのか否か、さらに検討する必要があるとはいえ、ここに注目し得る問題があるという Ritzer の確信は、多くの研究者が共有できるものではないだろうか。

## 注

- (1) 油井清光 (2003) は、「広義の」マクドナルド化と「狭義の」マクドナルド化とを区別するべきだという重要な指摘をしている。前者は、「近代社会におけるあらゆる現象の基本特徴ないし過程が合理化に向かっていることを、「マクドナルド化」という象徴ないし比喻によって表現する」ものであり、後者は「マクドナルド」という一個の実際の外食産業が、世界を席卷していくという狭義の具体的現象」をさす (油井, 2003:230-231)。Ritzer における「マクドナルド化」概念は、主として油井のいう広義のマクドナルド化の方に重なり合うと思われるが、後述するようにその境界は曖昧である。
- (2) Kalberg (1980) が Weber の著作から 4 つの合理性概念を析出してきた方法は、社会学のメタ理論研究 (Metatheorizing) と呼ばれるものであり、従来わが国の社会学研究において学史・学説研究と呼ばれてきたものとかかなり重なり合う概念である。この点については、正岡 (2003)、Ritzer (1991) を参照のこと。
- (3) 「形式合理性／実質合理性」という Weber における対概念は、この他に『法社会学』(Weber, 1972=1974) にも登場することはよく知られている。しかしこの両者には概念上の違いがある。千葉芳夫 (2006) は、『法社会学』における用語法の混乱を指摘した上で、この論文に登場する「形式合理性／実質合理性」という対概念は、基本的には一般的な合理性ではなく、法の領域に限定されたものとして解釈すべきだと指摘している。Weber の合理性概念については、橋本 (2000)、杉野 (2000)、吉田 (2005) 等の論考も参照されたい。
- (4) Mannheim (1940=1962) からの引用は、漢字表記を現代風にするなど一部表記を改めた。

- (5) 油井が指摘する「広義」のマクドナルド化と「狭義」のマクドナルド化の区別が、ここで再び重要になる。Ritzer においてはこの区別が曖昧であるために、マクドナルドやその他のファストフード・レストランで起こった事態が、そのままストレートにマクドナルド化を表すものとして扱われてしまうが、狭義のマクドナルド化が同時に広義のマクドナルド化を意味するか否かは、それ自体として検討しなければならない問題である。
- (6) 最近の再魔術化 (re-enchantment) の議論 (Ritzer, 2005) は、ある意味ではマクドナルド化の内包を充実させようとする理論的努力といえる。アメリカ社会はショッピング・モール、アミューズメント・パーク、カジノ、クルーズ船、テーマ・レストランといった消費の大聖堂 (cathedrals of consumption) ともいふべき新しい消費の手段を生み出し、消費に人びとを駆り立てる再魔術化が起きている、とされる。この点でモデルになるのはマクドナルドよりはむしろディズニーランドであり、消費の場面がディズニーランド化している、という。これはこれで興味深い議論であり、本論文の議論と関連はするものの、理論そのものが別の枠組みとなっているので、改めて別の機会に論じたい。
- (7) たとえば、Tannock (2001=2006) には、ファストフード・レストランであっても、従業員同士の強固な絆と呼ぶ例がいくつも登場している。実際のところ、Ritzer が強調するように従業員が入れ代わってばかりの店舗では、客の側からみて予測可能な対応がしてもらえるのかどうか不明であろう。
- (8) アメリカのマクドナルドと日本のマクドナルドの経営方針が異なることはよく知られている。日本マクドナルドの創業者であった藤田田が経営から退いてから、日本マクドナルドはアメリカ本社の指導をいっそう強くうけることになり、以前ほど独立した経営ではなくなりつつあるといわれている (田中, 2007) が、どこにいても画一的だという Ritzer の想定とは逆に、国によって、あるいは店舗によって、労働環境はかなり異なりうる。
- 文化によってファストフードに対する受けとめ方が異なるという点については佐藤 (2003) や Watson (1997=2003) を参照のこと。

## 文 献

- 千葉芳夫, 2003, 「合理化とマクドナルド化」, G・リッツァ/丸山哲央 (編), 『マクドナルド化と日本』, ミネルヴァ書房, pp.165-186.
- , 2006, 「法社会学」における形式合理性と実質合理性」, 『佛教大学 社会学部論集』, 第43号, pp. 31-43.
- 橋本直人, 2000, 「ウェーバー行為論における目的合理性と「秩序問題」—「カテゴリー」—をめぐって」, 『情況』, 11(6), pp. 39-52.
- Kalberg, Stephen, 1980, 'Max Weber's Types of Rationality: Cornerstones for the Analysis of Rationalization Process in History', *American Journal of Sociology*, Vol. 85 No. 5, pp. 1145-1179.
- Kroc, Ray, & Anderson, Robert, 1977/1987, *Grinding It Out: The Making of McDonald's*, St. Martin's Press. = 2007, 野地秩嘉監修・構成, 野崎稚恵訳, 『成功はゴミ箱の中に 一世界一、億万長者を生んだ男— マクドナルド創業者』, プレジデント社.
- Mannheim, Karl, 1940, *Man and society in an age of reconstruction*, Routledge & Kegan Paul., 1962, 福武直訳, 『変革期における人間と社会』, みすず書房.
- 正岡寛司, 2003, 「マクドナルド化過程の拡張とその意味」, G・リッツァ/丸山哲央 (編), 『マクドナルド化と日本』, ミネルヴァ書房, pp. 131-163.
- 三浦 展, 2004, 『ファスト風土化する日本—郊外化とその病理』, 洋泉社.
- 佐藤 昂, 2003, 『いつからファーストフードを食べてきたか』, 日経 BP 社.
- Ritzer, George, 1991, *Methatheorizing in Sociology*, Lexington Books.
- , 1993/1996, *The McDonalozation of Society: an investigation into the changing character of contemporary*

- social life*. Pine Forge Press. =1999, 正岡寛司監訳, 『マクドナルド化する社会』, 早稲田大学出版部.
- , 1998, *The McDonalidation Thesis : Explosions and Extensions*, Sage. =2001, 正岡寛司監訳, 『マクドナルド化の世界』, 早稲田大学出版部.
- , 2001, *Explorations in Social Theory*, Sage.
- (ed.), 2002/2006, *McDonalidation : The Reader* (2<sup>nd</sup> ed.), Pine Forge Press.
- , 2004, *The Globalization of nothing*, Sage. =2005, 正岡寛司監訳, 山本徹夫・山本光子訳, 『無のグローバル化—拡大する消費社会と「存在」の喪失』, 明石書店.
- , 2005, *Enchanting A Disenchanted World : Revolutionizing the Means of Consumption*, 2<sup>nd</sup> Edition, Pine Forge Press.
- Schor, Juliet, B., 1998, *The Overspent American : Why We Want What We Don't Need*, Basic Books. =2000, 森岡孝二監訳, 『浪費するアメリカ人—なぜ要らないものまで欲しがるか』, 岩波書店.
- 杉野 勇, 2000, 「視点の差異と合理性—目的合理性と整合合理性について」, 『情況』, 11(6), pp. 53-64.
- 田中幾太郎, 2007, 『本日より「時間外・退職金」なし—日本マクドナルドに見るサラリーマン社会の崩壊』, 光文社.
- Tannock, Stuart, 2001, *Youth at Work : The Unionized Fast-food and Grocery Workplace*, Temple University Press. =2006, 大石徹訳, 『使い捨てられる若者たち』, 岩波書店.
- 若林靖永, 2003, 「マクドナルド化と日本企業」, G・リッツァ／丸山哲央(編), 『マクドナルド化と日本』, ミネルヴァ書房, pp. 253-287.
- Watson, James L. (ed.), 1997, *Golden Arches East : McDonald's in East Asia*, Stanford Univ. Press. =2003, 前川啓治／竹内恵行／岡部曜子訳, 『マクドナルドはグローバルか—東アジアのファーストフード』, 新曜社.
- Weber, Max, 1904-05, *Die protestantische Ethik und der Geist des Kapitalismus*. =1989, 大塚久雄訳, 『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』, 岩波書店.
- , 1921, “Soziologische Grundkategorien des Wirtschaftens,” in *Wirtschaft und Gesellschaft*. =1989, 富永健一訳, 「経済行為の社会学的基礎範疇」, 尾高邦雄責任編集『世界の名著61ウェーバー』, 中央公論社, pp. 295-484.
- , 1972, “Rechtssoziologie,” in *Wirtschaft und Gesellschaft*. 5.rev. Auf., J. C. B. Mohr. =1974, 世良晃志郎訳, 『法社会学』, 創文社.
- 吉田 浩, 2005, 「マックス・ウェーバーにおける「形式合理性」と「実質合理性」との二律背反関係について」, 『徳島大学社会科学研究』, 18, pp. 63-143.
- 油井清光, 2003, 「グローバル化とマクドナルド化—合理性と非合理性の拮抗のなかで」, G・リッツァ／丸山哲央(編), 『マクドナルド化と日本』, ミネルヴァ書房, pp. 229-251.

\*本研究は、群馬大学「平成18年教育研究改革・改善プロジェクト経費」による研究助成を受けている。

(原稿提出日 平成19年9月25日)  
 (修正原稿提出日 平成19年11月14日)